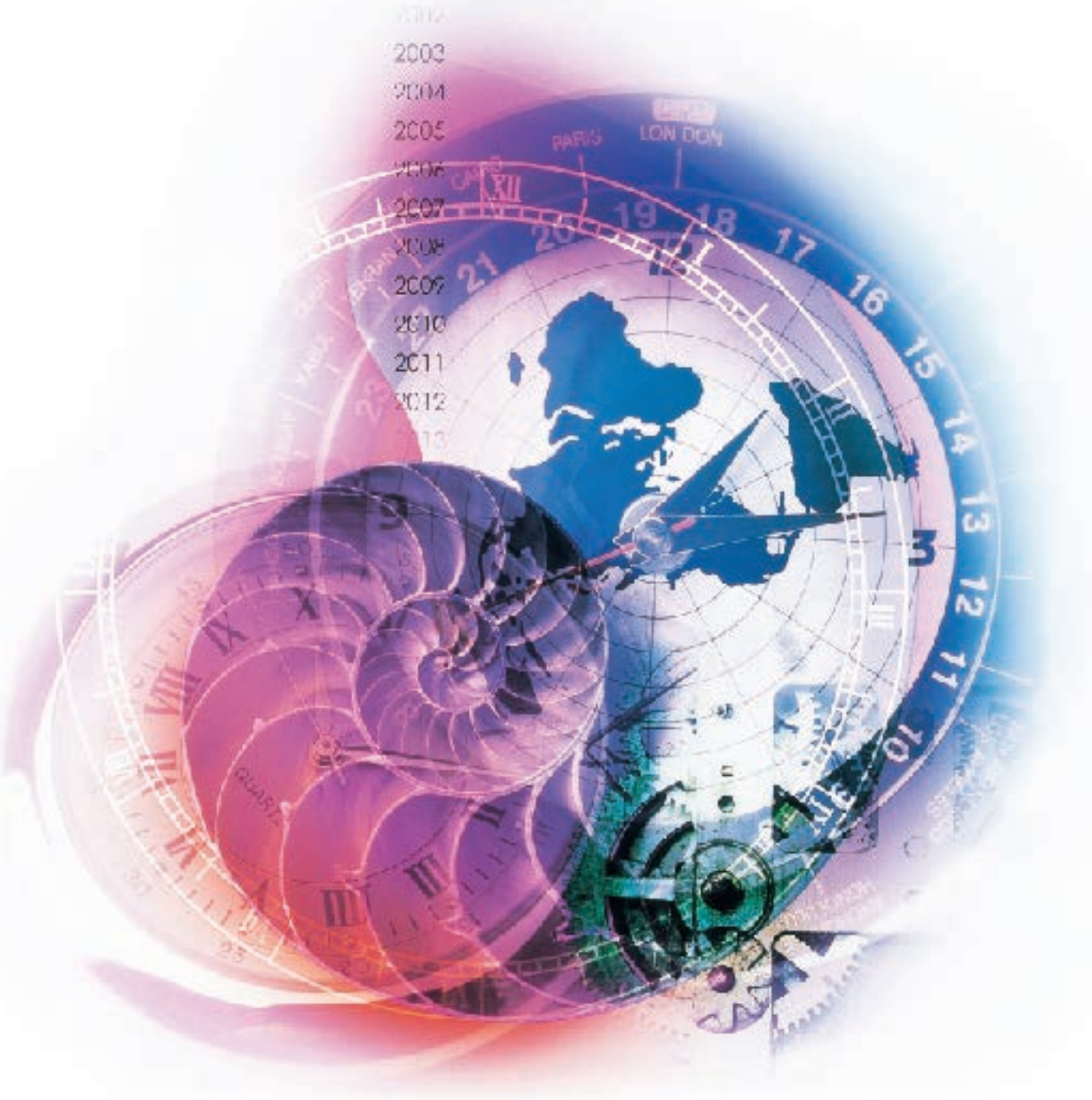
MEIJO UNIVERSITY

NEWS

RESEARCH INSTITUTE

NO. 20

2007



人・環境・未来に貢献する学術プロジェクト

Dynamic-Interface

総合研究所座談会 第九回

総合研究所では、異分野の研究者の交流を目的とした座談会を開催しており、今回は、「学際的共同研究の進め方」と題して、福島　茂アジア研究所長（都市情報学部教授）、天童睦子ジェンダー研究所副代表（人間学部助教授）、高倍昭洋総合研究所教授（総合学術研究科）、平松正行総合学術研究科助教授（薬学部・総合研究所運営委員）をお迎えして、総合研究所運営委員企画広報チーフ礒井俊行先生（農学部助教授）の司会進行により、平成18年12月9日（土）に開催いたしました。

学際的共同研究の進め方

開催趣旨

礒井（司会）：総合研究所では、「総合研究所の10年を振り返って」と題して行った第6回座談会（平成16年1月）で、学際的共同研究を如何に立ち上げていくかが今後の課題であるという結論を得ました。以来、学際的共同研究の推進について模索してきましたが、その流れの中に本年度の「アジア研究所」並びに「ジェンダー研究所」の設立を位置させることができると思います。そこで、本日は、学際的共同研究を推進されている先生方にお集まりいただき、「学際的共同研究の進め方」と題してご意見を賜りたいと思います。

学際的共同研究への取組

福島：アジア研究所では、アジアの持続可能な発展に資する研究・学術交流を展開していきたいと考えています。持続可能な発展という概念には、経済・社会・環境のバランスのとれた発展アプローチを通じて持続的に生活の質を高めること、また、現在世代のニーズの充足だけでなく、将来世代のニーズに配慮することが含まれています。とりわけ、前者は、複合的な学問領域を対象とすること、政策課題を統合的に検討する枠組みを必要としています。

天童：ジェンダー研究所は所長をおかず、研究メンバーがしなやかなフットワークで動ける柔軟な運用方法を取っており、現在は十数名のメンバーで研究活動を実施していますが、少しずつ、学内外に研究のつながりを広げていきたいと考えています。

今日のテーマである学際的研究についていえば、ジェンダー研究、女性学（women's studies）は本来、学際性に富んでおり、そもそもジェンダー研究はその誕生から、文学、社会学、心理学、教育学といった文系領域のみならず、理系分野を含め、学問領域をこえて生み出され、展開してきたものです。

高倍：私は、遺伝子工学的手法を利用して地球環境問題、食糧・エネルギー問題を解決しようとする研究を行っています。この研究テーマも学際性に富んでおり、研究の進展を図るには学際的共同研究が必須です。例えば、私たちが扱っている死海から単離した耐塩性ラン藻は菌の維持が大変困難ですが、その点はインドのバルナス大学の協力を得ています。耐塩性ラン藻の機能解析はタイのチュラロンコン大学と共同研究を行ったり、博士課程の学生を受け入れたりしています。バイオエタノールなどのエネルギー植物の開発の研究は民間企業と共同して進めています。有用植物への遺伝子導入とか解析は他大学と協力することもしばしばあります。さらに、最近は大学で得られた研究成果を社会に還元することが重要だといわれていますが、その場合は、経済的な評価、政治等も関係してきますので、文科系の人々との交流も重要になってきます。

平松：個々の研究レベルが深くなければ、共同研究等を行うことがなかなか出来ませんが、新しい境界領域を作っていくためには、問題解決型の企画があると、それに取り組もうという研究意欲も出てくるように感じます。

総合学術研究科では、現在、グリーン・バイオ・ビジネス創薬プロジェクトのもとで、「環境」をテーマに、文理の研究者がそれぞれの立場で、環境と植物、環境の調和と修復、社会と環境という観点から、研究を進めています。文系、理系の研究者のものの視点を学ぶ機会になっており、広い視野にたった成果が期待できるのではないかと考えています。

問題点・課題

礒井：先生方の学際的共同研究への取組につきまして、貴重なご意見を伺うことができました。では、研究遂行上問題点・課題等がございましたらお聞かせください。

福島：アジア研究所は、アジアというフィールドと持続可能な発展という研究ベクトルのもとに、名城大学での多様な学術シーズを連携・融合していく役割を担っていると言えます。ここでは、開発された技術も、社会的適用においては、その社会・経済・環境的なインパクトを踏まえて賢明な活用のあり方を模索する、逆に、持続可能な発展というニーズから技術を開発するなど双方向的な発想が求められています。

天童：外部資金の獲得も重要であると思います。同時に、グローバルな研究者の人的ネットワークを視野にいれ、たとえばアジアに放射状の人的研究ネットワーク拠点を形成するなど、新しいアジア型研究の展開可能性があり、そういう意味でもアジア研究所に期待していますし、私たちジェンダー研究のグループも、連携を図っていければと思います。

高倍：学内の学際的研究も重要かもしれませんが、外部と交流することも重視すべきだと思います。名城大学の特任教授で産業技術総合研究所の片山先生と議論しているうちに、私たちの専門分野である発根促進剤、遺伝子工学等の成果を生かして、タイに「名城の森」を作ろうという話が持ち上がってきました。このような取組が実現すれば、まさに国際的な学術研究につながるものと考えます。そのためには、協定の締結とか財政的問題など、いくつかの解決すべき問題を抱えておりますが是非実現できればと考えております。

平松：研究資金措置も重要と考えます。新しい学際的共同研究を始めようとする場合、通常、非常に多くのエネルギーが必要であり、また、短期間に成果が出せないことが多いので、総合研究所の研究助成金ばかりでなく、大学の研究資金の使用を、1～2年に限るのではなく、もう少し長いスパンで認めて貰えるようなシステムがあると助かります。

今後の展望

礒井：それでは、今後学際的共同研究を発展させるためには、どうしたらよいとお考えですか。

福島：アジア研究に関する学内ニーズとシーズを発掘するために企画型プロジェクトのテーマも学内公募していますが、将来的には、アジア研究所がイニシアティブをとって研究企画を行い、多面的な学問領域から参加研究者を募るようにしたいと考えています。また、各プロジェクトが実施している国際シンポジウム等の研究交流のなかから、学際的な新しい共同研究の発想が生まれてくることを期待しています。

天童：この座談会のように、さまざまな分野の先生方とこのように話しをする機会をもつのは刺激的であり、有意義なものと考えます。本学はキャンパス統合型の総合大学であり、その利点を生かす総合型、学際型の研究の可能性があります。都市情報学部も独自の良さを持っており、また、E-Learningなど遠隔地との相互情報交流も可能な時代であり、学内の研究交流を促すしくみ作りが総合研究所のひとつの課題ではないかと思います。

現在、ジェンダー研究プロジェクトとして「共同研究経費」による名古屋圏での調査を実施していますが、いい意味で「名城ブランド」の力を感じました。社会調査を行ううえで、あたたかい地域の協力を得られるのは本学の魅力であると思います。また同共同研究では、研究成果の発信を目指して、公開シンポジウムを企画しています（2007年1月実施）。今後は地域市民と大学の連携、地域貢献についても、考えていきたいと思います。

高倍：無理に学際的研究をしようとしてもうまくいかないと思います。大事なことは、それぞれの人がそれぞれの専門を極めることです。専門分野で得意とすることがあれば、異分野の優れた人と協力することは容易ですし、協力すると新たな展開を見せると思います。自分の分野で優れたものがない状態で協力しても優れた成果はあまり期待できないと思います。

平松：文理融合の共同研究というのは、個人的には、文系・理系の研究者が同じテーマのもと、それぞれの視点から、お互いの視点を共有しながら幅広い視野で進められれば良いと考えていて、専門領域の研究だけでは気付かなかった問題も掘り起こせるのではないかと考えています。またそれが、学際的共同研究につながっていくのではないかと思います。そのような意見を交流したりできる環境があれば、新たなシーズも出てくるのではないかと考えます。また、個々の教員が学際的共同研究を進めやすいような環境を、現在よりも一層、総合研究所が整備していく必要があるように思います。助成金制度だけでは、このような研究が続きにくいので、持続的に研究が進められる制度を期待します。

礒井：小さな総合大学である名城大学ですが、その分、機動力を発揮しやすいと思います。そして、その大部分が天白キャンパスに集まっていることから、学部を超えてスタッフが集まりやすく、学際的共同研究を進めやすい利点を持っていると思います。「環境」、「男女共生」など問題解決型のテーマを設定することによって、自ずと研究は学際的になって行くものと思われます。そこで、総合研究所としては、如何にテーマを設定し、関連の教員をつないでいくかという役割を果たすべきだと思います。

本日お聞きした貴重なご意見を総合研究所の学際的共同研究の推進に反映させて行きたいと考えております。

これからも、総合研究所の発展のためにご尽力を賜りますようよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

座談会出席者の紹介

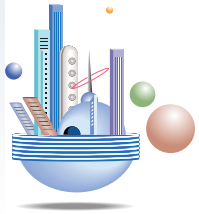
写真左から
- 平松正行　総合学術研究科助教授（薬学部・総合研究所運営委員）
- 礒井俊行　農学部助教授

写真左から
- 高倍昭洋　総合研究所教授（総合学術研究科）
- 福島　茂　アジア研究所長・都市情報学部教授
- 天童睦子　ジェンダー研究所副代表・人間学部助教授

MESSAGE

名城大学ジェンダー研究所

名城大学ジェンダー研究所 副代表
天童睦子（人間学部 助教授）



名城大学ジェンダー研究所は、平成18（2006）年春、人間学部を中心とする有志の教員たちによって提案され、総合研究所のもとに設立された研究組織です。

現在、学部を超えて人文・社会系の教員12名の中心メンバーが集い、学際性に富むジェンダー研究を目指して活動しています。

ジェンダー（社会的文化的性別）とは、欧米のフェミニズム、女性学のなかから生まれた概念であり、20世紀後半以降、その視座はさまざまな学問領域における重要な分析視角として定着してきました。また、世界的にジェンダー平等に向けた取り組みも活発化し、とくに1975年の「国際女性年」を契機として、続く国連女性の十年（1976−85年）、女子差別撤廃条約の採択（79年国連総会で採択、日本は85年に批准）といった流れを受けて、日本でも男女雇用機会均等法の制定（1985年）、男女共同参画社会基本法の施行（1999年）と、ジェンダー平等な社会形成に向けた法整備等が進められています。

とはいえ、世界経済フォーラム（2006）の男女平等指数では、世界115カ国中、日本は79位と、男女格差が依然として根深く残る国とみなされています。学術研究の面でも、日本は女性の理系進学率の低さが際立ち、また、研究者に占める女性割合は1割強と、先進工業国中かなり低い位置にあります。このような国際的、社会的背景のなかで、ジェンダー視点に基づく研究と教育の充実は、理系・文系を兼ね備えた総合大学として、豊かな人間性の育成と新たな知の創造を目指す本学においてきわめて意義のある事業といえるでしょう。

本学ジェンダー研究所の特徴は、所長をおかず、メンバーのチームワークとそれぞれの専門性を生かした柔軟な活動方針をとっている点にあり、主に次のような研究活動を目指しています。第一に、国内外の女性学、ジェンダー研究の現状と課題を分析し、国際比較の視点を織り込みつつ、学際性に富む学術文化の発展に寄与する研究を行うこと、第二に、愛知、東海を基盤として、地域と連携して歩む大学の推進を目的とし、男女共生社会の実現に向けた社会的・地域的貢献の具体的推進を図ること、の2点です。つまり、単なる学術研究にとどまらず、地域との積極的連携を視野に入れた活動を目標としています。なぜなら、ジェンダー研究は、学際性を伴う高度な専門性をもつ研究領域であるとともに、その研究成果が、性差別の是正、撤廃という実践的・具体的課題と結びつくものであるからです。

ジェンダー研究所は、まだ生まれたての研究機構ですが、初年度（平成18年度）の研究活動の一端をご紹介します。本研究所メンバーが中心となり、「ジェンダー視点を基盤とする人間学と共生型コミュニティの構築」を課題に、平成18年度学術研究高度化推進特別経費・共同研究経費による研究の機会を得て、広義の人間学的課題（人間形成、言語コミュニケーションなど）と、共生のコミュニティの構築にかかわる諸問題の分析に取り組みました。その一環として、名古屋市内の幼稚園のご協力のもと、子育て期の父母の育児意識調査を実施したほか、2007年1月には「女性が拓く未来社会−男女共生と地域コミュニティの構築に向けて−」と題して公開シンポジウムを行いました。同シンポジウムでは、水田珠枝先生（東海ジェンダー研究所理事、名古屋経済大学名誉教授）の基調講演、田端泰子先生（京都橘大学学長）の特別講演「戦国時代を生きた女性たち」をはじめ、海外で活躍する女性研究者の報告も交え、密度の濃い講演、報告が行われました。多くの学生、地域の方々にもご参加いただき、充実した内容となりました。

このように、ジェンダー研究所は、女性学・ジェンダー研究に関心をもつ研究者との連携を図るとともに、地域に開かれた研究活動の拠点化を目指すものです。女性・男性問題、ジェンダー研究に関心をお持ちの方はどうぞ研究会にご参加ください。

最後に、本研究所の構想が短期間のうちに芽吹き、具現化されましたのは、兼松学長、理事の方々、板倉総合研究所長はじめ、温かく、力強くご支援くださった先生方、スタッフの皆様のご尽力のおかげと存じます。心より感謝申し上げます。今後は、　本学のアジア研究所をはじめ、学内外の研究機関との協力体制も視野に入れ、息長く名城大学らしいジェンダー研究の深化と発信に努めてまいりたいと思います。

名城大学大学院「総合学術研究科」研究紹介

高齢者の回想に関する心理学的研究
― 研究活動と地域貢献とのリンク ―

名城大学 講師　志 村 ゆ ず

1. はじめに

高齢者に関する研究は、少子高齢者化による急激な高齢化という社会情勢のなかで、多くの領域で年々増加しています。私は、生涯発達心理学と臨床心理学という立場で高齢者に関する実証的な心理学的研究を中心に取り組んでいます。主な研究の柱として、①高齢者の回想研究、②高齢者の心理アセスメントに関する研究、③高齢化社会をとりまくメンタルヘルスに関連した研究、の3つに集約されますが、①、②を中心に紹介します。

2. 高齢者の回想研究

回想とは、簡単に言うと、過去を振り返ることです。写真や道具などの刺激物を用いながら、コミュニケーションを展開するのが、「回想法」です。

回想法の起源は、バトラー(Butler,R.N.)によるライフ・レヴュー(life review)の概念の提唱にあります。バトラーは、ライフ・レヴューを高齢者の自然で普遍的な過程であると位置づけています。すなわち、死が近づくと自然発生的に過去をふり返るという。高齢者が自分の人生を要約し、死の準備を行うために進むと考えました。もっともすべての高齢者がライフ・レヴューに成功するのではなく、個人差があることも補足している。過去をふり返ることにより、エリクソンの述べている老年期の発達課題の肯定的な側面である「自我の統合」に至る者もいれば、もう一方の側面である「絶望感」に至る者、すなわち過去と折り合いのつかない高齢者もいることをも指摘しています。すなわち、ライフ・レヴューの達成に個人差があり、回想によって自我の統合をめざすことができる可能性が示されました。

高齢者の回想法の研究は、回想を行うと高齢者の行動や情動に変容がみられるという研究仮説に基づいて回想法の効果評価を実証的に検討しています。回想法グループでは、セッションを重ねるにつれ、回想の頻度が増し、統合感の増加がみられたり、社会的な交流が増加したりと生活満足度と心理的健康に改善がみられることが報告されています。これらを実証的な側面から評価しています。

それらでは、方法の開発と評価方法がセットで行なわれることが大切です。

また社会構成主義(バーガーとルックマン，1966)らの基本的な主張によれば「現実は社会的に構成される」という現象があげられます。すなわち、クライエントのとりまく世界は、社会的な側面からも構成されるということです。回想法によって、高齢者が実り多い豊かな人生を語ることにより、周囲からの高齢者へのスティグマが払拭され、高齢者を尊敬のまなざしで見直すことができる可能性があります。そこで、高齢者の語りによって周囲からの反応の変化をとらえることを念頭においたアイデアを考えています。これらの研究は、フィールドワークによってデータを得ることが多いのですが、実験室研究とは異なり、研究協力者は、多くの市民の方々となります。インフォームドコンセントなどの研究の倫理観が大切となっている今日では、研究データを得たお返しに、結果のフィードバックあるいはそれを加工した形での還元作業が大切であると考えられます。このテーマからの還元としては、高齢者の心理学的な援助とスティグマの払拭という2点を見据えながら行っています。

研究結果から構成される内容として、ユーザーとして活用しやすい援助方法としての回想法、地域や世代間を超えた交流と共生がここにあげられます。

3. 行政への地域貢献

長野県阿智村では、長野県コモンズ支援金を得て、『ふるさと阿智村物語』のDVDを作成しました。民俗写真家、熊谷元一氏による多くの農村写真を回想法の刺激のための音楽と映像集にまとめました。これらは、農村などの遠隔地に在住する高齢者にとって、コミュニケーションの媒体となるDVDになればと考え、今度これを用いた効果評価を検討しています。

▲熊谷元一撮影「運動会」

4. 国際的な活動

隔年で国際回想法・ライフレビュー会議が開催されています。2007年11月には、サンフランシスコで開催される予定です。

HP：http://www2.uwsuper.edu/cee/III/IIRLR/Welcome.htm

総合研究所 公開講座「ライフサイエンス実験講習会」

参加者募集のお知らせ

名城大学総合研究所では、毎年「ライフサイエンス実験講習会」を開催しております。理工学部・農学部・薬学部の3学部で順番に開催しており、本年は農学部の番で「基礎遺伝子操作」をテーマに行います。皆様のご参加をお待ちいたしております。

◎開催日時：平成19年3月23日（金）　9:30～16:00
◎会　　場：名城大学天白キャンパス
　　共通講義棟北　N002学生実験室
◎テ ー マ：「基礎遺伝子操作」
　　― 光るバクテリアはなぜ光るか ―
◎講　　師：名城大学農学部　市原茂幸教授　他
◎募集人員：40名程度
◎受 講 料：無　料
◎問合せ先：名城大学総合研究所（学術研究支援センター）　TEL（052）838-2034

公開シンポジウム 報告

女性が拓く未来社会 ～男女共生と地域コミュニティの構築に向けて～

基調講演「ジェンダー研究の現代的意義と課題」
講師：水田珠枝 氏
（東海ジェンダー研究所理事、名古屋経済大学 名誉教授）

第1部　「男女共生と国際社会」
パネリスト：伊東玲子 氏（カンタベリー大学 講師）
木村捨雄 氏（名城大学人間学部 教授）
天童睦子 氏（名城大学人間学部 助教授）

第2部　特別講演「戦国時代を生きた女性たち」
講師：田端泰子 氏（京都橘大学 学長）

去る1月13日、名城大学ジェンダー研究プロジェクト主催、総合研究所後援による公開シンポジウム『女性が拓く未来社会』～男女共生と地域コミュニティの構築に向けて～ が開催されました。

今回のシンポジウムには約350人の参加者があり、基調講演に東海ジェンダー研究所理事の水田珠枝氏、特別講演に京都橘大学学長の田端泰子氏といった、それぞれの専門領域における第一人者を招いて、国際的・歴史的視点から「ジェンダー平等な生活・文化空間」のあり方を検討しました。未来社会を切り拓いて行く新しい女性像について考えるという面からも、また、ジェンダー研究を名古屋から発信し、同時に地域貢献を果たしていく面においても、地域住民・学生が一体となった、大変熱の入ったシンポジウムとなりました。

「男女共生と国際社会」と題したパネルディスカッションでは、人間学部の木村捨雄教授・天童睦子助教授、ニュージーランドのカンタベリー大学の伊東玲子講師の3人がパネリストとなり、それぞれの視点からジェンダー研究の発表を行いました。また、東海・東京・関西・九州から集った研究者による研究分科会では、より専門性の高い研究報告が行われました。

ジェンダー（社会的性別）の考え方は、世界標準となっているものの、日本ではまだまだ浸透していない部分が多く、今後の名城大学ジェンダー研究所から発信される多くの研究成果に期待が寄せられます。

総合研究所

アジア研究所 国際協力セミナー 報告

ジャワ中部沖地震：在住アーティストからの発信と救援活動

廣田　緑 氏（こどもプロジェクト代表）

去る1月12日（金）名城大学アジア研究所主催による国際協力セミナー『ジャワ中部沖地震：在住アーティストからの発信と救援活動』が開催されました。

講師として、こどもプロジェクト代表の廣田緑氏を迎えた今回のセミナーには、日頃からボランティア活動に取り組む学生や、アジア地域に関心を持つ学生・教職員等、88名の参加者がありました。

廣田氏は、インドネシアに15年以上在住しており、国内外で個展・グループ展を行う等、幅広く活躍されているアーティストです。

セミナーでは、昨年5月に発生したジャワ中部沖地震では自身も被災に会う中、ごく身近な友人からの被災者支援の気持ち（義援金）を行動（被災者への物資救援）に移したことがきっかけとなり、過去にボランティア活動をした経験がない中、試行錯誤を重ねながらも、様々なアイデア（救援パック・おりこうさんパック、栄養補助パックの作成、こどもテント・プロジェクトの立ち上げ、地震読本の作成・配布等）で救援活動を進め、また自身のブログを通じてその活動報告をされていたことが紹介されました。

講演後には、参加者から「初めて取り組む救援ボランティア活動において、様々な場面でどのように基準づくりを行ったのか。」「将来、国際協力機構（JICA）の職員として働きたい夢があるが、現地にすばやく溶け込める方法は?」等の質問があり、アジアの多様性を知り・深める、良い機会となりました。

名城大学

組換えDNA講演会 報告

演題　①「イネ――いもち病菌相互作用の解析」
寺内良平 氏（財団法人 岩手生物工学研究センター　主席研究員）

②「相同組換えと遺伝子ターゲティング法」
井上弘一 氏（埼玉大学大学院工学研究科　教授）

③「果実への糖集積機構の解明による品質向上」
山木昭平 氏（名古屋大学大学院生命農学研究科　教授）

平成18年11月16日（木）名城大学タワー75レセプションホールにおいて、名城大学組換えDNA実験安全委員会・名城大学総合研究所・日比科学技術振興財団の共催によるDNA講演会が開催されました。

同講演会は、名城大学における組換えDNA実験の安全と普及を目的として開催されております。当日は本学教員、理系の学生、院生など約120名の参加があり、それぞれの研究分野の最先端の話題が披露され、活発な質疑応答が行われました。

編集後記

ニュース20号では、「学際的共同研究の進め方」と題して行われました第九回の座談会の模様と、４月に開設した「ジェンダー研究所」の紹介、大学院総合学術研究科　志村ゆず講師の研究報告等を掲載しました。

次号では、平成19年度 総合研究所「学術研究奨励助成制度」の採択者、「総合学術研究論文集・紀要」の目次を掲載する予定です。

なお、このニュースの企画・編集は下記の**企画広報担当**と**学術研究支援センター**が担当いたしました。

企画広報担当　礒井俊行（農学部）　榎本雅記（法学部）
伊藤秀俊（経営学部）　榎本博明（人間学部）
平松正行（薬学部/総合学術研究科）

発行／平成19年３月１日

名城大学総合研究所

〒468-8502 名古屋市天白区塩釜口1-501
TEL(052)832-1151 FAX(052)833-7200
E-mail souken@ccmails.meijo-u.ac.jp

この冊子は古紙配合率100%再生紙と、
環境にやさしい植物性大豆油インキを使
用しております。